第１回「おいしいね　たのしいね」公開講座開催報告

塩田博子・稲員祥子・高杉志緒・芳賀絵美子・亀田冨喜代*

Report on the First "*It's Delicious and Fun*" Extension Lecture Jointly Organized by the Departments of Nutritional Science and Early Childhood Education and Care

by
Hiroko Shiota, Syouko Inakazu, Shio Takasugi,
Emiko Haga, Fukiyo Kameda

要旨

本稿は、平成25（2013）年度、本学主催の公開講座　第１回「おいしいね　たのしいね」に関する実践報告である。本学では平成22・23年度、栄養健康学科・保育学科の教員と学生ボランティアによる「親子で学ぶ「食」と「遊び」」公開講座を行ったが、「３回連続講座で気軽に参加しにくい」「弟や妹がいる家庭の参加は困難」という参加希望者の意見もあった。そこで、平成25年度は１日のみの開催とし、未満児の託児を別室で行いながら、親子クッキングと手作りおもちゃ制作を行う講座を企画し、実行した。

本活動を通じて、開催目標である「地域住民に対し、家庭における「食育」の重要性を伝える」「親子がふれ合う時間と手作りおもちゃの良さを味わう機会を提供する」の双方を概ね達成することができた。また、参加学生にとっても「食育」「保育」「親子のふれあい」の重要性を学ぶ機会を得ることができた。今後、公開講座の改善・継続によって、「食育」「遊び」の重要性を伝え、親子のふれあいの場を提供することによって地域貢献を実現していきたい。

キーワード：食育基本法、子育て支援、手作りおもちゃ、学生ボランティア、託児、家族交流

＊　下関短期大学非常勤講師

１　はじめに

平成 22・23 年度に本学 2 学科（保育学科・栄養健康学科）の専門性を生かした地域貢献活動を企画した。それは、発育・発達の著しい幼児期に大切な基本的生活習慣を身につける子育て支援の一環としての公開講座である。企画・実行は各学科教員（管理栄養士資格取得者、保育士資格取得者）および一般教育科教員（言語表現担当教員）が中心となって行った。同時に日頃、当該教員に指導を受けているゼミナール学生がボランティアとして事前準備や当日の実行に参加し、親子での「食育」や「遊び」を中心とした子育て支援活動を行った。

平成 22・23 年度は、冬季の各月 1 回ずつ、合計 3 回（基本的には全 3 回参加）の親子講座を企画・実行した。講座終了後の参加者の声として「内容は良かった」「親子で楽しく過ごすことができたが、参加者が少なかったので残念だった」「参加費が高い」という意見がみられた。

このように、過去 2 年間の開催状況を把握することによって、応募者が少数で充実した公開講座が開催できなかったことを分析した。すると開催条件に関する以下 4 つの問題点が浮かび上がった。①開催時期（冬季 10 月末～ 1 月）、②回数（月 1 回・計 3 回）、③参加費（ 1 家族 3 人の場合 1500 円）、④参加条件（大人は 2 名参加： 1 人加わるごとに 400 円加算）、以上 4 つの開催条件が対象層に適合することが難しいことが如実となった。具体的に適合困難な理由を挙げると、①年末は行事が多く参加し辛い時期、②計 3 回とも参加した家族が少なかった、③ 1 回 1500 円以上支払う参加費は子育て家族には割高である、④大人 2 名すなわち両親双方が参加できる家族に制限されてしまうこと、以上がアンケートや参加状況から判明した。

そこで平成 25 年度は、上記 4 つの問題点の改善（①開催時期は 6 月、②回数は 1 回、③参加費を保険料のみにする、④参加条件は 1 組につき大人 1 名以上）を行った。過去 2 年間は行わなかった 3 歳未満児の託児（参加者家族に 3 歳未満児がいる場合、託児希望者のニーズに対応）を設け、親子・家族間で楽しくコミュニケーションを取ることができ、「食育」「遊び」を中心にした活動ができる講座を企画した。

また、本講座の目的として、以下 4 つを設定した。①地域住民に対して貢献を行うと同時に、下関短期大学の認知度を高める。②地域住民に対し、家庭における「食育」の重要性を伝える。③子ども達に「遊び」を通じて食の楽しさ・大切さを伝える。④親子がふれ合う時間と手作りおもちゃの良さを味わう機会を提供する。

上記の経過を踏まえて、次章より第 1 回「おいしいね　たのしいね　―親子クッキングと手作りおもちゃ―」と題した公開講座の計画・実行を報告する。

2　実施方法

平成25年６月29日（土）、本学３号館調理実習室および演習棟保育内容演習室（以下「演保」と略記）において当該公開講座を実施した。本章では以下に、募集・広報、前日までの流れと当日の役割分担、当日の実行状況について、順次報告する。

2・1　募集・広報・実施概要について

当初の計画では下関市の市報および「サンデー下関」に掲載予定であった。しかし、市報は近年掲載希望が多いため、市の後援イベントでなければ日付とイベント名程度の掲載にとどまるという事由により、今回は掲載を断念した。また、「サンデー下関」にはファクシミリにて無料広告の掲載依頼をしたが、依頼が５月に入ったため開催時期に比して遅かったこともあり、掲載されなかった。従って、市内広報誌による参加者募集はできなかった。なお、５月31日、市政記者クラブに投稿依頼を行った。

その他の広報活動としては、旧市内の幼稚園28園と保育園45園ならびに児童館４館へ同一デザインのポスターとチラシ（図１）を郵送（５月30日）または持参（５月下旬から６月上旬）して参加者を募った。

参加対象は３歳～小学校就学前の子どもとその保護者とし、定員は20組とした。応募方法は往復葉書に必要事項を記入して郵送という方法に一本化し、〆切は６月11日消印有効とした。

図１　ポスターとチラシ

図２　返信用はがき

次に、実施概要について述べる。参加費については、前章で述べたようにこれまでの反省を活かし、保険料として１人50円のみの徴収とし、その他の経費は本学共通予算を使用した。

更に、本年度の新たな試みとして、親と参加幼児のコミュニケーション促進の一助として３歳未満児の託児を実施することとした。日頃、未満児の育児が中心となりがちな家族に対し、以上児とのコミュニケーションの場を提供するためである。

これらの結果、14家族（大人14名、幼児21名、児童１名、託児乳幼児６名、託児希望なし乳児２名）からの応募があった。

なお、応募者には返信用葉書を印刷して、開催に関する「ご案内」を返送した（図２）。

２・２　前日までの流れと役割分担

今回の公開講座について担当者（塩田・稲員・高杉・芳賀、以上４名）は、実施３か月前の平成25年３月末より計画作成・事前準備を開始した。前日までの主な流れと役割分担（表１）は以下の通りである。

平成25年度　公開講座「おいしいね　たのしいね」開催までの流れ

４．１（月）企画内容・予算に関する話し合い（学長・塩田）
４．９（火）全体会議①　開催日、講座内容、担当、募集方法についての検討
５．16（木）全体会議②　ポスター・チラシ掲載内容の検討
５．23（木）全体会議③　ポスター・チラシの配布準備（印刷・封筒詰め）
５．29（水）ポスター・チラシ掲示依頼（市内保育園・幼稚園など）、配布開始
５．30（木）全体会議④　打ち合わせ　各講座担当の進捗状況の把握
（調理３回の試作とレシピの作成、受付用名札の作成、託児の方法と事前準備など）

表１　平成25年度公開講座「おいしいね　たのしいね」役割分担表

業務内容	担当学科	担当教員名	（所属学科）担当学生　学年人数
献立作成	栄養健康学科	塩田・芳賀	―
試食・調整・前日準備		塩田・芳賀 他２名	（栄養）２年３名
当日「親子クッキング」補助		塩田・芳賀・ 高杉　　他２名	（栄養）２年３名・１年２名 （保育）２年３名
大型紙芝居	一般教育	高杉	（保育）２年３名
受付・託児	保育学科	稲員 亀田(非常勤)	（保育）１年７名
「手作りおもちゃ」制作		稲員	（保育）１年７名

ポスター・チラシ配布（市内保育園・幼稚園など）、郵送

6.13（木）全体会議⑤　講座申し込み状況の把握、各講座担当の進捗状況の把握、当日の役割分担と流れについての検討、購入物品・前日までの用意確認

6.27（木）レクリエーション保険申し込み

6.28（金）全体会議⑥　学生ボランティアの顔合わせ・当日の打合せ

前日準備　各会場の設営

表２　平成25年度公開講座「おいしいね　たのしいね」実施状況

	栄養健康学科（学生７名含）	一般教育（保育２年３名含）	保育学科（保育１年７名含）
8：30	教員出勤（調理実習室）	教員出勤 （調理実習室および演保）	教員出勤（演保）
9：00	学生集合（調理実習室） 材料分配	学生集合（調理実習室） 看板設置	学生集合（演保） 受付･託児準備･看板設置
9：30		参加者誘導（受付場所の演習棟から調理実習室へ案内・誘導）	受付開始（名簿チェック、保険料の受領） 未満児の託児開始
10：10	開催あいさつ（調理実習室） 「親子クッキング」調理体験説明		託児（演保）
10：25	調理体験開始		
11：50	会食準備	託児（演保）に会食開始を連絡・誘導補助、幼児をトイレ誘導	未満児を誘導、 トイレへの引率、 保護者への引渡し
12：00	会食（調理実習室）		
12：20	会食・観賞（調理実習室） 配布物説明	大型紙芝居上演 （調理実習室）	会食・観賞（調理実習室）
12：50	（参加者・教員・学生全員）　演　保　へ　移　動		
13：00	託児補助（演保）	託児補助（演保）	パネルシアター、「手作りおもちゃ」制作（割り箸鉄砲）
13：45	アンケート配布・記入・回収・手遊び（演保）		
13：55	託児補助（演保）	修了証授与の補助（演保）	修了証授与（演保）
14：00	参加者解散・片付け（調理実習室・演保）		
15：30	片付け終了後反省会（調理実習室）		
16：00	終了（教員・学生解散）		

２・３　当日参加者・実施状況

前述したように（２・１）、本講座の応募者は、14 家族（大人 14 名、幼児 21 名、児童１名、託児乳幼児６名、託児希望なし乳児２名）であった。しかし、開催当日、参加予定者（幼児）の体調不良による欠席が１家族（保護者１名、幼児２名）あったため、13 家族（大人 13 名、幼児 19 名、児童１名、託児乳幼児６名、託児希望なし乳児２名）で実施した。当日は、前掲の役割分担に従い（表１）、講座を開催した（表２）。

３　内容報告

２章で述べた役割分担・事前準備・実施状況等を踏まえ、本章では以下、業務内容（受付・託児・親子クッキング・大型紙芝居・「手作りおもちゃ」制作）ごとに、実施内容と事後の反省等を順次報告する。

３・１　受付（担当教員：稲員）

受付は、当該担当教員と保育学科１年生７名（担当教員指導ゼミナール所属学生）で担当した。受付場所は、「託児」と「手作りおもちゃ」制作を行う教室がある演習棟入口（玄関）に設置した。託児を希望する保護者に対しては、保育を行う未満児について必要な事項を聴取して記録を行った（３・２・２、３・２・３参照）。荷物を預かった後、受付担当学生が託児対象の子どもを託児コーナーへと誘導した。受付業務は、名札裏面の両面テープがはがしにくく時間がかかったこと以外は、スムーズに行われた。なお、受付終了後、「親子クッキング」参加者は別棟３号館の２階にある調理実習室へ移動しなければならなかったが、その誘導は受付担当学生ではなく、保育学科２年生３名（高杉ゼミナール所属）が担当した。なお、受付業務の詳細と工夫点は、以下の通りである。

〈受付業務〉

・氏名（ふりがな）、住所、電話番号、アレルギーの有無の確認（いずれも申込み時に記入）。
・保険料金（参加者１人につき 50 円）徴収。
・名札の配付：氏名（読み方）を確認し、服に張り付ける。
・荷物預かりの希望がある場合は、名前のタグをつけて預かる。

〈家族ごとのマーク（動物マーク）について〉

１日の家族別行動を円滑に進めるため予め、家族ごとに動物のマークを設定した。午前「親子クッキング」の班別行動、午後「手作りおもちゃ」制作の場にも動物のマークを活用するこ

ととした。参加家族は14家族の予定であったため、それぞれの家族に対して１種類ずつ動物（ウサギ・いぬ・パンダ等）を決め、名札・荷物札・調理室のテーブル・レシピ・おもちゃ作りのテーブル・材料箱・お土産入れ袋など、配布物や作業場所の案内等、全て同じ動物のマークで統一した（写真１）。この動物マークの導入については、事前打合せの折、参加者全員が判別でき、しかも親しみやすいものとして、候補に挙がったものを採用した。

受付における動物マーク入りの配布物は、名札と荷物タグである（写真２、３）。双方、学生と共同で制作した。

写真１　家族ごとの動物マーク

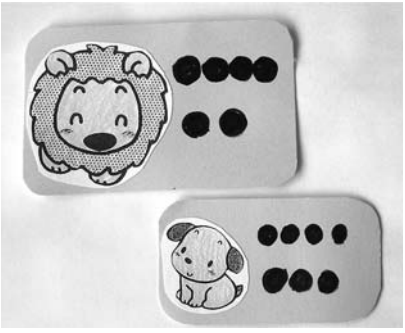


写真２　名札

写真３　荷物タグ

名札は、ピンク色の色画用紙に色鉛筆で着色した動物のイラストを貼り付け、空きスペースにひらがなで名前を記入した。服に直に貼り付けられるように、裏面の周囲に両面テープを付け、安全面に配慮して四つ角は丸く切り取った（写真２）。大人用名札は、大きさ約5.5㎝×９㎝、氏名を平仮名で記入し、子ども用は一回り小さい４㎝×７㎝とし、服に貼り易くした。

荷物を預かる際のタグについても、同様に家族ごとの動物マークを使って手作りのものを準備した（写真３）。

３・２　託児（担当教員：稲員・亀田）

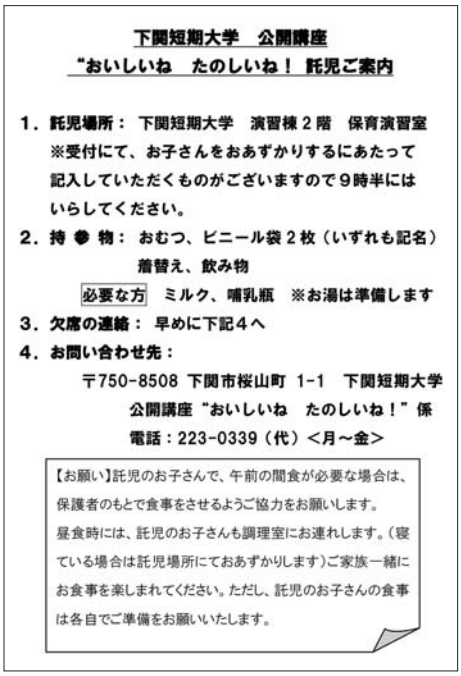
未満児の託児は、保育士資格を有す本学保育学科常勤教諭１名（稲員）、保育士経験者である本学保育学科非常勤講師１名（亀田）、保育学科１年次学生７名（手作りおもちゃ担当と兼任）、合計９名で携わった。そこで、事前準備・当日の受付・託児内容・考察反省の順に報告する。

３・２・１　託児の事前準備

前述したように、参加募集の際に託児希望の有無を確認したところ、６名の乳幼児の託児希望があった（２・１）。そこで以下、事前案内状の送付と、短大側の事前準備について報告を行う。

参加希望家族には全員、返信葉書を送付したが（図２）、託児希望家族には別途、後日改めて、託児に関する詳しい内容や持参物を依頼する案内状を送付した（図３）。保護者に持参を依頼した用品等は以下の通りである。

〈保護者に準備・持参して頂くもの〉
・着替え・おむつ・水筒（飲み物）・好きなおもちゃ・ビニール袋２枚（いずれも記名）
・（必要な場合）ミルク・哺乳瓶・食事
　＊お湯は短大で準備
〈短大が用意するもの〉
・ビニール袋・お尻ふきナップ・バスタオル・敷物・ポット（お湯）・タオル・ティッシュ
・体温計・消毒・絆創膏などの救急用品
・おもちゃ・絵本などの玩具
・バケツ・雑巾などの掃除用具
・記録用の用紙・筆記用具


下関短期大学　公開講座
“おいしいね　たのしいね！ 託児ご案内

1．託児場所： 下関短期大学　演習棟２階　保育演習室
※受付にて、お子さんをおあずかりするにあたって記入していただくものがございますので９時半にはいらしてください。
2．持 参 物： おむつ、ビニール袋２枚（いずれも記名）
着替え、飲み物
必要な方　ミルク、哺乳瓶　※お湯は準備します
3．欠席の連絡： 早めに下記４へ
4．お問い合わせ先：
〒750-8508 下関市桜山町 1-1　下関短期大学
公開講座“おいしいね　たのしいね！”係
電話：223-0339（代）＜月～金＞

【お願い】託児のお子さんで、午前の間食が必要な場合は、保護者のもとで食事をさせるようご協力をお願いします。
昼食時には、託児のお子さんも調理室にお連れします。（寝ている場合は託児場所にておあずかりします）ご家族一緒にお食事を楽しまれてください。ただし、託児のお子さんの食事は各自でご準備をお願いいたします。

図３　託児希望家庭に送付した案内状

また、昼食について「親子クッキング」での調理は、託児の乳幼児分は用意していないことを【お願い】という欄を設けて葉書中に注意書きを行い、予め各自で準備して頂くことを依頼した。

以上、託児希望家族に対する事前案内と持参依頼品について述べたが、次に短大側の前日準備について、報告を行う。

〈託児に関する前日準備〉

託児の場所は、午後の「手作りおもちゃ」を制作する会場と同じ演保に設けた。明るく風通しも良く、板張りで素足や靴下のまま歩くことができること、部屋を出てすぐに洋式のトイレがあること、おもちゃを作る際には一隅で託児のコーナーを設けられることなどがこの教室を選択した理由である。部屋を入って一番奥の約三分の一のスペースを託児コーナーとし、手前はおもちゃ作り用にテーブルと椅子を配置した（図４）。

３歳未満児を預かるため、会場の教室は特に念入りに掃除し、箒で掃いた後丁寧に水拭きした。また、ブラインドの紐はくくって子どもの手に届かないようにしておき、テーブルの荷物

かけはたたんでおくなど安全面への配慮も徹底した。座って遊んだり、寝転がったりすることが出来るように付属第一幼稚園より借用した約２畳分の畳式カーペットを敷き、おもちゃ（学生の手作りおもちゃ）や絵本などを準備した（図４）。

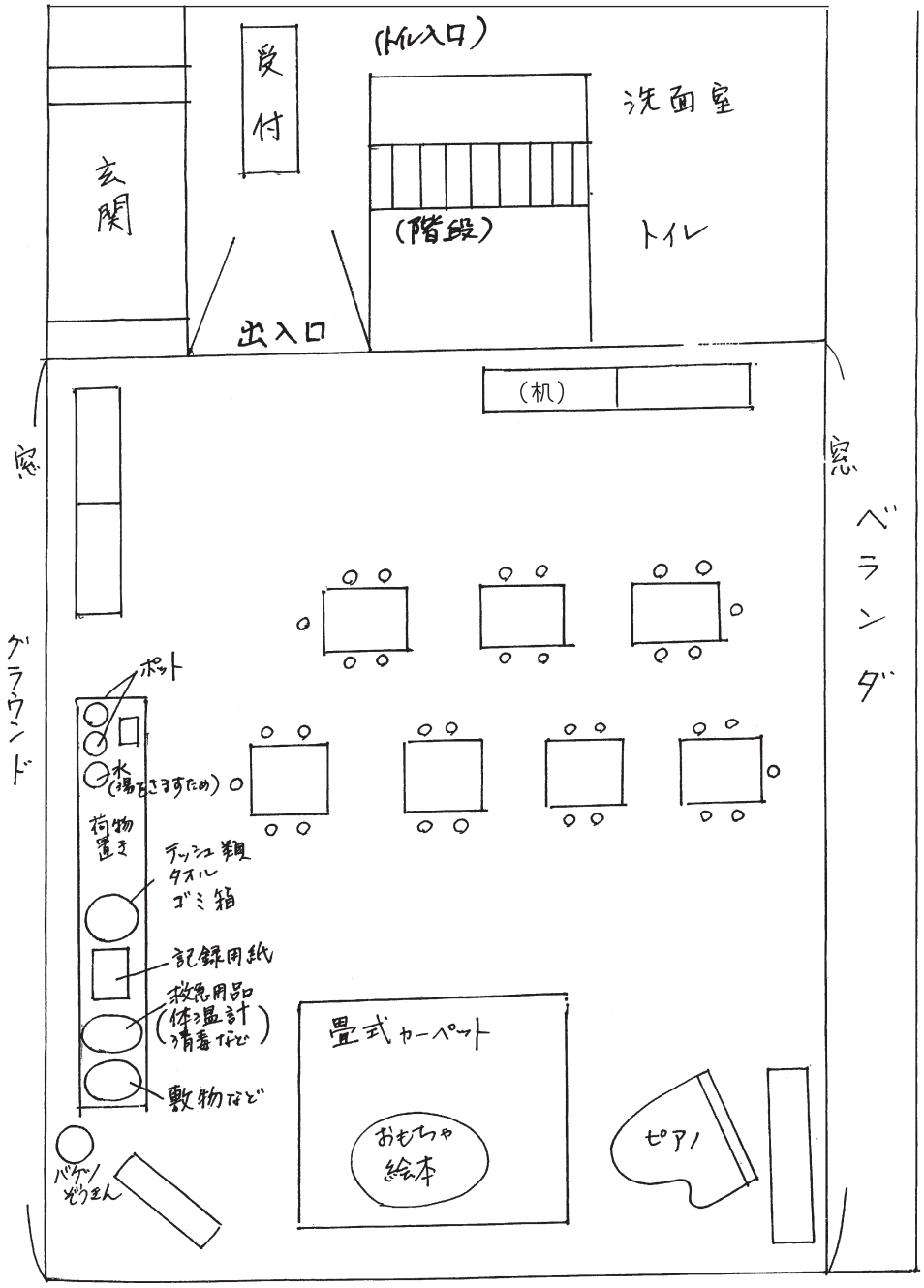


図４　託児室見取り図（演習棟保育内容演習室、「手作りおもちゃ」作成会場と同室）

写真４　託児用品（タオル・ティッシュ類、名簿）

写真５　託児用品（ポット、洗面器・水など）

また、窓際のテーブルに、ビニール袋・お尻ふきナップ・バスタオル・敷物・ポット（お湯）・タオル・ティッシュ・体温計などを使いやすいように並べて置き（写真４・写真５）、託児中の排泄・水分補給・睡眠・着替えなどの様子がわかるよう、記録用の用紙と筆記用具を準備した。バケツ・雑巾なども子ども達の手の届かない場所に用意した。

なお、１階の共同トイレには子ども用の簡易式便座を備え付け、必要に応じて使用できるようにした。

３・２・２　当日の託児受付

受付の項ですでに述べたが（３・１）、受付担当者は、託児（３歳未満児対象）も担当した。当初は受付担当者と託児担当者とを分けるよう計画していた。しかし、受付で子どもの様子をみながら保護者から子どもの状況を直接伺った学生が託児を担当する方が責任も持て、子どもも保護者も安心できると判断し、全員で受付と託児を行うよう急遽変更した。

受付における託児関連の質問事項は以下の通りである。

・子どもの名前・ニックネーム
・受講中の保護者の連絡先（携帯電話番号）
・生活リズムの確認（朝ごはんの量や便排せつの状況）

以上の質問を通じて、子どもの状況を把握し、一覧表に記入した後、保護者から子どもと持参品を預かって託児を行った。

また、受付と託児を行う教室への移動については「保護者と別れるのが辛い」という感情ではなく「楽しい部屋に入る」という印象が持てるように工夫した。具体的には、託児を行う教室が受付からよく見えるように、保育内容演習室の入口の扉は全開した。また、おもちゃや絵本など楽しい物が子どもの目に入り環境になじみ易くした。受付後、保護者が移動する調理実習室と託児室は離れているため、どのような所で託児が行われているのか保護者に安心してもらえるように配慮したためである。

受付では、託児の子ども一人ひとりに笑顔で声をかけながら、保護者から子どもを預かった。

保護者から離れられず泣いている子どもには、担当の学生が抱っこしたりおもちゃであやしたりし、場合によっては暫く保護者に託児コーナーで一緒に遊んでもらって慣れた頃、そっと移動してもらった。

事前の準備と託児担当教員（亀田）の適切なアドバイス、学生の丁寧な対応と機転の利いた行動で受付は全体的にスムーズに行われた。

託児の受付は、子どもは勿論だが、保護者が安心できる情報の共有と雰囲気作りが大切であることを改めて感じた。

３・２・３　託児内容

子ども１人に対して学生１人が担当し、保育を行った。託児中の配慮事項として、学生に以下の事項を伝えた。

・預かる子どもの年齢の発達を押さえておく。
・天候を考慮しておく。
・体の状態（発熱の有無・おなかが痛いなど）と排泄の回数を記録しておく。

これらの配慮事項を念頭に置き、託児対象児全員におむつ替え、水分補給（約 20 分から 30 分おき）は定期的に行い、その都度記録した。担当の学生は、預かった時間内（親子クッキングが行われている 10 時から 12 時頃までの時間帯）の子どもの状態を記録し（特に便の状態)、状況を把握しておくようにした。また、用意した手作りおもちゃや絵本を使って世話をした（写真６）。

写真６　託児の様子

親子クッキングの試食前に保護者に引き渡す際の報告については、担当の学生が保護者に直接、子どもの行動の変化（例：当初は泣いていたが、次第に泣き止み約 30 分後にはおもちゃで遊び始めた等)、楽しかった遊び（玩具)、そしておむつ替えや水分補給の状態など、預かっている間の子どもの様子を、保護者が安心する言葉がけや態度を考えながら伝えるよう心掛けた。

担当教員の個人的な感想を述べると、始めは泣いていた子ども達が、だんだんと慣れてくれたことをとても嬉しく感じた。託児を担当した学生は子どもの目線に姿勢を落として、笑顔で真剣に関わっていたので、好感が持てた。改めて、一時保育をする難しさ、すなわち、子どもの日常の様子を理解しておくこと、現状について保護者からの状況説明を受けておくこと、双方の重要性を感じた。同時に、託児中、事故もなく無事に保護者のもとに全員の子ども達をお

渡しできたことを感謝したい。

反省として、ミルクを作ったり哺乳瓶を洗ったりする為の手洗い場がなかったことが挙げられる。おむつ替え等の後は、衛生面に配慮して、必ず手を洗う（または濡れティシュで拭く）ことを徹底すべきである。その為にも手洗い場がすぐ近くにあることが理想である。

アンケート５－②の意見・感想の中の「おねえさん先生が下の子のこともとてもよく見てくださったので上の子も私（母親）との時間を持てて嬉しそうでした」という記述から、３歳未満児の託児を設けたことは、親子、家族間で楽しくコミュニケーションを取り、過ごすことを目的とした催し物を企画する上で成功だったといえよう。これまで（兄弟の）下の子どものことを気にして親子で触れ合う催し物への参加をためらっていた家族が参加しやすくなった、すなわち託児を設けたことが今回参加人数の増加した要因の一つではないかと考えられる。

託児を担当した保育学科１年生にとって、このたびの体験は３歳未満児と関わり方を学ぶ良い機会となった。定期的におむつ替えや水分補給を行うこと、その記録を取り託児中の子ども達の様子と併せて保護者に報告することで安心してもらえることを学んだ。

３・３　「親子クッキング」調理体験（担当教員：塩田・芳賀）

３・３・１　献立作成および備品整備

食育基本法前文では「「食育」とは、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てること」と位置付けられている。これに基づき、今回の親子クッキングでは「食育の重要性を伝える」「親子が触れ合う時間を提供する」ことを目的とした。献立作成の際には、①子どもでも作業可能な手順を含むもの、②色彩が豊かでひと目見て食べたくなるようなもの、③幅広い食品群を使用しているもの、④好き嫌いを克服できるようなもの、⑤季節に合ったもの、⑥子どもが喜ぶネーミング

表３　親子クッキングのメニューと栄養価（幼児１人分）

料理名	エネルギー（kcal）	たんぱく質（g）	脂質（g）	カルシウム（mg）	塩分（g）
ぱくぱくサンドイッチ	282	10.8	10.6	99	1.3
まめまめスープ	51	3.3	1.8	17	0.3
ころころパフェ	71	2.8	0.7	161	0.1
合計	404	16.9	13.1	277	1.7

写真７
親子クッキングメニュー

写真８　調理用踏み台

写真９　子供用のはし・スプーン・フォーク

写真 10　班編成用カード

のものなどに留意した。その結果、メニューは「ぱくぱくサンドイッチ」（スパゲティを混ぜ込んだオムレツ入りと蒸しかぼちゃ・きゅうり・チーズ入りの２種類）、「まめまめスープ」（枝豆の豆乳ポタージュ）、「ころころパフェ」（丸くくりぬいたすいか・メロン・ヨーグルトのパフェ風）の３つとなった（表３および写真７）。卵アレルギー児（１名）には、オムレツの代替食品として白身魚のソテーで対応した。

子ども用の設備がない本学において講座専用の備品が必要と考え、少しでも安全に調理できるように、以前から備品としていた子ども用包丁に加え、踏み台（写真８）と、食事用に子ども用はし・スプーン・フォークを新たに購入した（写真９）。

３・３・２　実施

１班１～２家族とし、全部で７班を編成した。受付で家族ごとに動物の名札を配布したこと

に基づき（３・１）、班分けの表示は動物マークを使用した（写真 10）。

入室時に資料を各家族に配布した。配布資料は当日のレシピ、「たべものきかんしゃにこにこ号」と食品の群わけ、栄養士会発行「少年期」パンフレット、以上の三点である。「たべものきかんしゃにこにこ号」と食品の群分けは、筆者の一人である塩田のゼミナールで作成したものである。本学紀要 31 号で紹介したように、幼児向けの食品群分け媒体であり、赤（からだをつくる）黄（ねつやちからになる）緑（からだのちょうしをととのえる）の三つの貨車からなる。裏面には、各色の代表的な食品が絵と文字で示され、自宅でも使いやすいように工夫した。なお、配布物の説明は、紙芝居終了後に行った。

調理にあたって 10 分程度の全体レクチャー（写真 11）を行った後、各班に分かれて調理体験（写真 12）を行った。各班には両学科学生や教員 1 名ずつがサポート役として入った。各班とも大きな怪我もなく調理を終えることができた。

「親子クッキング」に関する担当教員の感想は次の通りである。安全確保のため、当初は 20 組まで参加募集を予定していたが、実際に講座を進めた結果、８班 16 家族が限界だと感じた。

家庭ではなかなかできない調理作業を子どもも保護者も心から楽しんだ様子が感じとられた。この講座が、包丁使用の初体験という子ども参加者が含まれていたため、調理を始めるよい機会を与えることができたと考えられる。保護者の希望で 2 歳児が 1 名調理に参加したが、やはり発達上、多人数が一斉に調理を進める雰囲気の中での包丁等を使用した作業は困難であるように見受けられた。安全面を考慮して、来年度以降の調理については 3 歳児以上の参加としたほうがよいと感じた。

反省点を 2 点挙げる。ひとつ目は、学生への事前指導不足と保護者へのレクチャー時間の短さから、両者とも献立の理解が不十分な状態での実習となってしまったことである。参加者か

写真 11　調理開始レクチャーの様子

写真 12 「親子クッキング」の様子

らも「学生さんが料理の手順をもう少し理解してくれているとよかった」、「学生さんにリードして進めてほしかった」等の意見が寄せられた。来年度は事前に全スタッフ向けのデモンストレーションなどをしっかり行い、参加スタッフ全員がレシピを理解し、手順を頭に入れた状態で講座に取り組めるようにしたい。特にサポート役として各班に入る学生へは、リーダーとして保護者を上手に導けるような指導も必要である。

ふたつ目は、「親子が触れ合う時間を提供する」という講座目的の達成への取り組みである。特に栄養健康学科の学生は、外部の方との接触の不慣れさと、実習を進めることに気を取られすぎたことにより、親子の触れ合いを援助するという視点を忘れがちであった。親子が触れ合いながら調理を進めていけるよう、学生スタッフも援助者であるということを事前のデモンストレーション時に周知させ、援助の具体的方法をしっかり指導する必要性があると感じた。

３・４　保育学科学生「親子クッキング」補助と大型紙芝居（担当教員：高杉）

保育学科２年生（３名）も「親子クッキング」に参加した（３・３）。日常の保育現場ではなかなか見られない親子の会話・子どもが初めて包丁を使う様子などが観察でき、とても勉強になった。但し、親子クッキングに参加した保育学生は、事前説明を受けたのみで、事前の調理を行わなかった。そのため、使用するのに適した調理器具の選択と使用方法・切砕方法（微妙な大きさ・形）・加熱時間の調整など、体験してみなければわからず、保護者や子ども達の援助が上手くできなかった。今後の課題として、保育学科学生を含めた事前調理の必要性が挙げられよう。

写真 13　大型紙芝居「きらきらマイ・ドリーム」上演光景

また、試食後半に親子クッキングに参加した保育学科２年生（３名）は、大型紙芝居「きらきら・マイ・ドリーム―お米ができるまで―」を披露した。この紙芝居は、平成 24 年 12 月保育学科主催「創作発表会」の舞台発表の一環として制作・初演された作品である。紙芝居は山口県阿東地区の農家を舞台とした、お米の妖精（キララ）がイネの生長を教えるという内容であり、同地域出身学生の発案・台本・演出による創作紙芝居である(写真 13)。

当初、親子クッキングのメニューが白米・豚汁を予定していたので、この紙芝居の披露を通じて、子ども達に稲の生育過程を理解してもらい、保護者には地産池消を推進して頂く一助と

なる「食育」活動を行うという目標を立てていた。

しかし、メニューがサンドイッチを主食とした洋風の献立になったので、参加者の関心を上手く引き出す導入の工夫を行う必要があった。おにぎりのペープサートで呼びかけを行ったが、不十分に感じた。また、紙芝居を鑑賞する子ども達は、食器を目前にしていること、音響が良くなかったこと、耐震工事のため窓の外の景色（重機機械の通過など）により集中力を持続することが困難な状況であった。

アンケート結果の考察でも後述するが（４・３）、今後、前年度に制作した紙芝居等の出し物を行うのではなく、当日のクッキングのメニューに応じた内容の決定を行う必要があろう。

３・５　「手作りおもちゃ」制作（担当教員：稲員）

開催目標の１つである「親子がふれ合う時間と手作りおもちゃの良さを味わう機会を提供する」という事項を実現する為、平成22年度より開催してきた「親子で学ぶ「食」と「遊び」」公開講座で毎回取り上げてきた伝承遊びの「割り箸鉄砲」制作を今回も行った。

調理室にて親子クッキング体験・試食・大型紙芝居参観後、午前中に託児を行った演保へ移動して実施した。保育学科教員と１年次学生（７名）が中心となり担当した。園児用のテーブルと椅子に２家族ずつ配置し（調理の時と同様名札につけられた動物のマークで班分け)、必要な道具（はさみ・マジック）と材料（割り箸・輪ゴム）は事前に各テーブルに配っておいた。託児の必要な子どもの世話は、託児担当の教員と調理・大型紙芝居担当の教員・学生に協力してもらった。

導入として、「お弁当箱のうた」のパネルシアターと手遊びを行い（学生２名担当)、前半で行った「親子クッキング」とのつながりを持たせ、「食事の時に使用する箸（割り箸）を使っておもちゃ（鉄砲）を作って遊ぼう」と投げかけて制作にとりかかった。学生２名が段ボールを利用して作った大型の割り箸模型を使いながら作り方を説明し、残りの学生が各テーブルに

写真 14　鉄砲の的

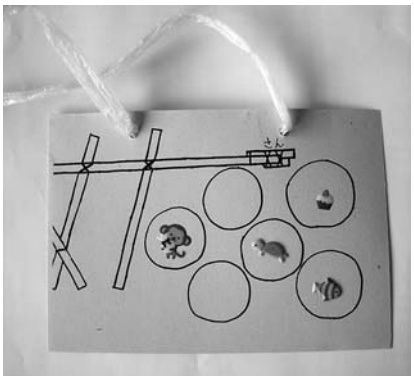


写真 15　シール用カード

ついて補助、各テーブルには作り方の説明をプリントした用紙も準備した。子ども一人に一つの鉄砲を親子で力を合わせながら作るように進めた。

鉄砲が出来上がった子どもから、教室後方に設けた「的当てコーナー」に飛ばす為の輪ゴムを持って移動し、学生が事前に作成し準備した様々な形の的（写真 14）に向かって的当てを楽しみ、的を撃ち落とすことができたら、また別コーナーでカード（写真 15）に学生からシールを貼ってもらうようにした。

写真 16　公開講座参加賞

遊び終了後、作成した割り箸鉄砲と的を一つずつ、用意した紙袋に入れて持ち帰るようにした。また、閉会時には学生手作りの公開講座の参加証（写真 16）を学生全員から子ども達一人ひとりの首にかけ、お土産とした。

写真 17　鉄砲遊びを楽しむ親子

実施内容に対する担当教員の感想と反省は、以下の通りである。

導入のパネルシアターに対して、子ども達はとても楽しんでおり、調理室から移動後、排泄などを済ませて全員が演習室に揃うまでの時間調整、次の活動への期待を持たせる役目を十分に果たしていた。

親子で一緒におもちゃ作りに取り組み、出来上がった鉄砲を使って子ども達は的当てを大いに楽しんでいた（写真 17）。撃ち落とすとカードに好きなシールを貼ってもらえるのも、楽しみをさらに増す良いアイディアだった。輪ゴムを飛ばすには少々コツが必要なため、最初はすぐに飛ばせない子どもも何度も挑戦するうちに飛ばせるようになって達成感を味わえる、伝承遊びならではの醍醐味を味わってもらえたのではないかと思う。

一方、制作の場面では、反省すべき点がいくつかある。鉄砲作りの説明は、担当学生は事前にクラスの学生を対象に模擬的に実践を行い、説明の分かりづらい点などの指摘や助言を受け、説明の方法や準備に改良を重ねてきた（例：割り箸を切る場所や順番が分かりやすいように、事前に割り箸１本ずつ色で目印や番号を記入したこと。説明が見やすいように段ボールを利用して大型の割り箸の模型を作ったこと。以前に使用した作り方のプリントに不備があったため書き直したことなど）。

しかし、実際の実施現場では、説明がまだまだ分かりづらかったことが反省点に挙げられる。その状況は、アンケートの結果にもあるように、「説明が分かりづらかった」という回答が２

名、「作り方が少し難しかった」という回答が 11 名あったことからも窺える。その原因の一つが、事前に説明の方法についての検討が十分ではなかったことである。試行錯誤を繰り返し練習したつもりだったが、まだまだ不十分であったことが考えられる。以前使用した作り方のプリントをより分かりやすいものに作り直したが、十分に吟味できずに使用した為、説明との調整が完全ではなく混乱を招いてしまったかもしれない。また参加した子どもの年齢が幅広く、できることにも個人差があることを把握し、どこまでを補助すべきかを考えておくことが必要だった。親子で楽しむことが目的なので、まず保護者に作り方を理解してもらった上で子ども達と関わりながら作れるように補助する方法や声のかけ方を工夫すべきだったと反省する。

説明が行き届かなかったもう一つの原因は参加者の人数に対する学生スタッフ数の割合と考えられる。平成 22 年度・23 年度と行った公開講座「親子で学ぶ「食」と「遊び」」ではいずれも参加者が 3 家族程度と少なかった為、おもちゃ作りの際に学生スタッフが 1 家族に 1 名補助でつくことができた。全体説明担当の 2 名の学生が説明終了後に的当てコーナーに移動し、的を並べたり飛ばした輪ゴムを拾い集めたりし、補助担当の学生が遊び方の説明や遊びの補助にじっくり関わることができた。今回も説明担当の学生 2 名と補助の学生に分かれたが、様子を見ながら補助するようにしていたこと（担当がはっきりしていなかった）や、一つのテーブルに 2 家族と以前より参加者が多かったことから、十分に補助ができない家族が出てしまったのではないかと考えられる。的当てコーナーとシール貼りの担当も兼ねていた為、こちらも十分に関わることが出来ない子どもが出てしまったのではないかと反省する。この点がアンケート結果の「あまり楽しめなかった」「楽しめなかった」が各 1 家族あったことに反映していると思われる。

割り箸鉄砲作りは、今回対象の子どもにとっては少し難しいが、それ故に保護者と一緒に作り上げる喜びを感じて欲しいと考え、敢えて取り上げた。また、鉄砲の輪ゴムの飛ばし方も最初は少し難しいが何度か挑戦するうちにコツをつかんで上手く飛ばせるようになり達成感が味わえる。この伝承遊びならではの楽しさを味わって欲しかった。その点ではアンケートの結果「作り方が少し難しかった」という回答が多かったのは、意図どおりだったかもしれない。しかし、一番大切な「親子でのふれあい」を楽しんでもらうためには、取り上げる題材や遊びの内容、準備や取組み方に更に検討・工夫が必要と感じた。

今回スタッフとして参加した学生 7 名は全員入学して間もない 1 年生ばかりだったが、参加者が楽しめるようアイディアを出し合い、コツコツと下準備を進めたこと、作り方に関しても事前に実践しクラスメートからアドバイスを受け修正を加えるなど、試行錯誤を繰り返しながら努力を重ねたことを評価したい。親子でふれ合う楽しさ、手作りおもちゃの良さを味わってもらう喜びと難しさを実感できたことは、保育者として成長していくうえで貴重な経験であったと思う。今後の保育実習や活動に大いに活かして欲しいと願う。

３・６　当日取材について

市政記者クラブに投稿依頼をしたことにより、調理体験の時間帯に毎日新聞が、手作りおもちゃの時間帯に山口新聞が取材に訪れた。両紙とも翌日の朝刊に写真入りで掲載された。

４　アンケート結果

公開講座の最後に時間を設け、保護者を対象としたアンケートを実施し、その場で回収した。調査項目は（１）募集方法について①この公開講座をどこでお知りになりましたか②このような講座などの情報はどこで入手されますか③このような講座で、参加費がひと家族どのくらいまでなら参加を考えますか（２）調理実習について①親子で楽しむことができましたか②作るのは難しかったですか③自分たちで作ったものは美味しかったですか（３）大型紙芝居について①ご家庭での朝食は、パン食、ご飯食、どちらの回数が多いですか②内容は分かりやすかったですか③絵は分かりやすかったですか（４）割り箸鉄砲作りについて①作り方や遊び方の説明は分かりやすかったですか②作り方は難しかったですか③親子でふれあいながら鉄砲作りを楽しむことはできましたか（５）全体について①今日１日楽しく過ごせましたか②ご意見・ご感想をお聞かせくださいの５項目14問とした。なお、（５）の②のみ記述式とした。集計方法は、エクセルを用いた単純集計である。参加の13家族全てにアンケートへ回答していただき回収率は100％であった。

４・１　募集方法について

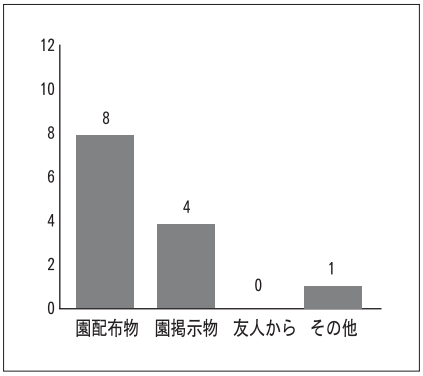


図５－１　今回の情報入手先（複数回答）

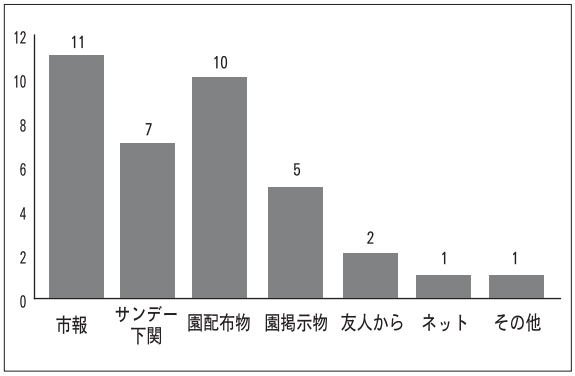


図５－２　日常の情報入手先（複数回答）

図５－１、２より日常の情報入手先が市報や「サンデー下関」が主な情報源となっていることが分かるが、園からの配布物もそれに劣らない広告効果が期待できることが分かった。また、その他と回答し児童館と答えた参加者もいた。来年度以降は、市報・「サンデー下関」への広

告掲載を積極的に進めていくだけでなく、今年度行った保育所・幼稚園・児童館への郵送・持参という募集方法も引き続き行っていく必要があると考える。

また、今年度は広告掲載依頼が遅くなってしまい掲載に至らなかったため、２回目以降は１月ごろから企画を行うほうがよいであろう。

図５－３よりひと家族当たりの参加費は500円までが一般的に受け入れられる金額ということが分かった。今年度は保険料のみとした参加費を引き上げ、その分、講座の内容を充実させるなどの検討が必要と考えられる。

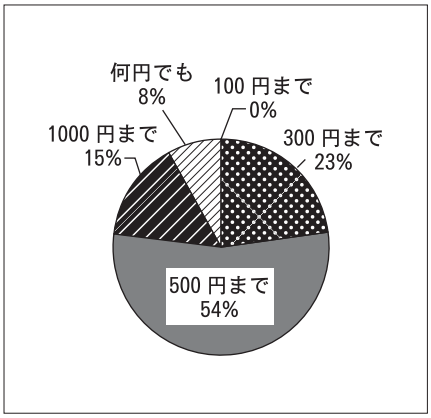


図５－３　講座に出費可能な参加費

４・２　親子クッキングについて

図６－１より「とても楽しかった」と「楽しかった」の２肢を合わせると100%になり、親子が触れ合う時間の提供という目的を十分に達成できたものと考えられる。また、図６－２より、作るのが難しかったというものは０％、さらに図６－３では、おいしかったが90%以上を占め、今回のレシピは、親子クッキングレシピとして適切なものであったと考えられる。

しかし、少数意見ではあるが　「調理実習のメニューが食べにくい。野菜好きの子もスープは一口

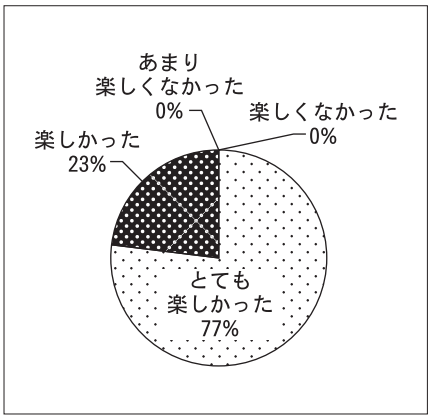


図６－１　親子で楽しむことができたか

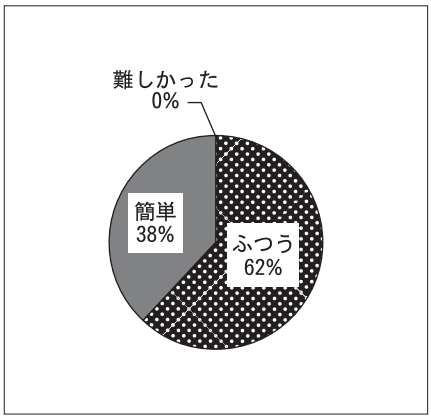


図６－２　作るのは難しかったか

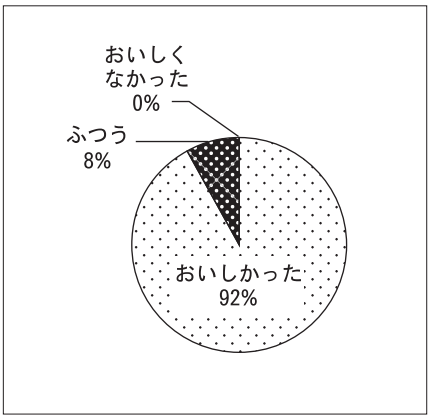


図６－３　自分たちで作ったものは美味しかったか

でギブアップ。」といった意見もあった。成長に必要な栄養を摂ることができ、かつ子どもが食べやすい献立のさらなる研究が今後の課題である。また「託児の子どもの分のお弁当は作って持ってくるのが大変」という意見もあり、保護者の手間もかかることと家族のふれあいを重視した際に、託児の子のみ持参弁当というのは適切か検討の余地がある。

４・３　大型紙芝居について

大型紙芝居担当教員が依頼した質問は、３つである。１つ目は「朝食は、パン食、ご飯食、どちらの回数が多いか」という質問であった。「親子クッキング」はサンドイッチすなわちパンが主食であったが、上演した紙芝居はお米、すなわちご飯が主題であった。従って、日常の朝食におけるご飯の割合を質問することによって、紙芝居の主題の把握のしやすさを尋ねることにした。図７－１より結果は、「ご飯とパン半々」が最も多く（46%）、次いで「パンが多い」(31%)、「ごはんが多い」(23%）であったため、朝食でご飯を半数以上の家族が日常的に摂取していることが窺えた。

紙芝居に関するアンケートは、「内容は分かりやすかったか」「絵は分かりやすかったか」以上２点であった。図７－１、図７－２より内容・絵については、双方、とても分かりやすい（内容：５名・38%、絵：８名・61%)、まあまあ分かりやすい（内容：７名・54%、絵：４名・31%）と約９割が理解してくれた反面、約１割（１名・８%）が「あまり分からない」という回答を寄せている。

１割が理解できなかった理由として最初に挙げられるのは、発達や年齢による理解度の違いがある。

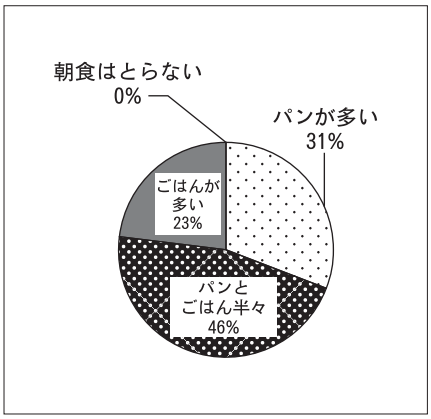


図７－１　朝食は、パン食、ご飯食、

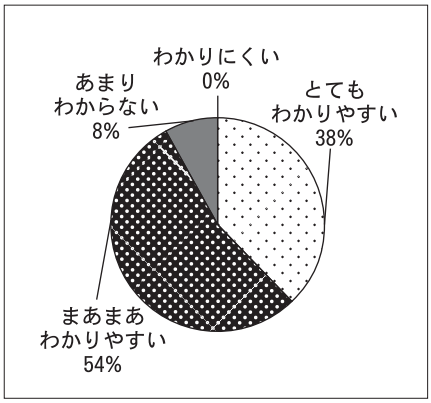


図７－２　内容は分かりやすかったか

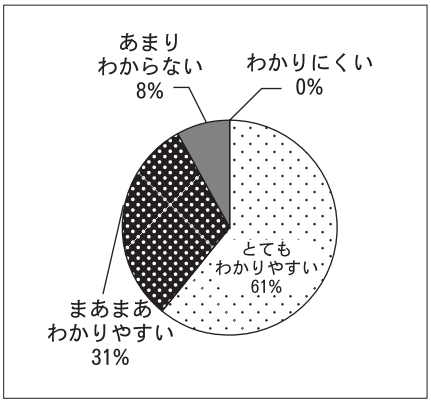


図７－３　絵は分かりやすかったか

学生は５歳児以上という設定で、ストーリー性がある 20 分以内の大型紙芝居を用意したためである。次に挙げられるのは、調理・試食と紙芝居の内容の食い違いである。調理・試食の主食がパンであったのに対し、紙芝居は、コメが主題であったため内容の齟齬による興味関心の薄さが理解力の欠如を招いた可能性もあろう。

先述した（３・４）が、今後は、メニューに合わせた出し物・リクリエーションの設定や、当日の場の雰囲気に合わせた内容の手遊び・絵本読みが臨機応変に出来るよう、現場に応じた応用力を養う必要性があると考えている。

４・４　割り箸鉄砲作りについて

図８－１より「作り方は難しかったか」について「簡単だった」15％に対し、「少し難しかった」85％と多かった。前述のとおり（３・５）、割り箸鉄砲作りは今回参加の年齢の子どもには少し難しいがそれ故に親子で一緒に作り上げる喜びを感じて欲しいという思いで取り上げた。従ってこの数字は意図したとおりと捉えられる。

しかし、図８－２より「説明は分かりやすかったか」について「分かりやすかった」「だいたい分かった」合わせて 85％に対し、「分かりにくかった」という回答も 15％あったことは、説明の方法や準備について今後検討する課題を残したといえる。図８－３より「親子で楽しめたか」についても「十分に楽しめた」「まあまあ楽しめた」が合わせて 84％あった一方「あまり楽しめなかった」「楽しめなかった」が 16％あったことも反省しなければならない。説

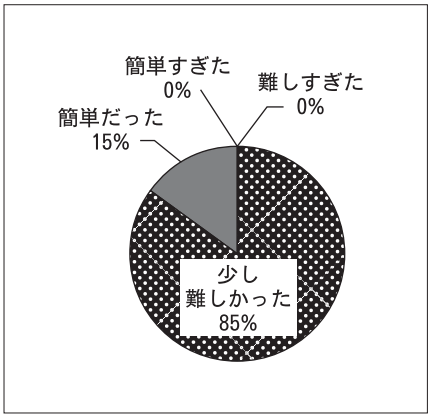


図８－１　作り方は難しかったか

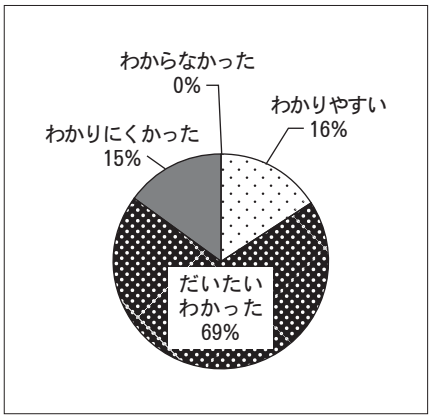


図８－２　作り方や遊び方の説明は分かりやすかったか

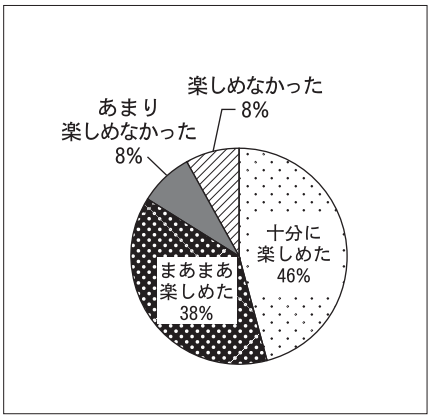


図８－３　親子でふれあいながら鉄砲作りを楽しむことはできたか

明が分かりにくかったが故に親子で一緒に作り上げる楽しみが味わえなかったのではないかと考えられる。

また、遊びについても、初めは少し難しい飛ばし方も何度も挑戦するうちにできるようになる伝承遊びならではの醍醐味を味わって欲しかったが、前述のとおり、学生スタッフの数や配置・段取りの不備から十分に遊べないまま終わってしまった子どももいたかもしれないと考えられる。更に、的当ては子どもだけが体験し、保護者は見ているだけの家族もいたので、今後は親子で一緒に遊べる遊び（おもちゃ）にも目を向けて考えたい。

「親子がふれ合う時間と手作りおもちゃの良さを味わう機会を提供する」という当初の目的を念頭に置き、取り上げる遊び・おもちゃの内容も含め、学生の配置・活動の流れ、説明・関わり方の配慮、事前の練習など今後も検討を重ねたい。

４・５　全体の感想について

図９－１より全員が楽しかったと答え、この公開講座に対する参加者の満足度が高いことが推察できる。今回参加していただいたのは地域住民の一部ではあるが、この公開講座を通して、下関短期大学を認知していただき、さらに好印象を与えることができたと考える。これからも継続的に講座を行っていくことが、より高い効果を生むであろう。

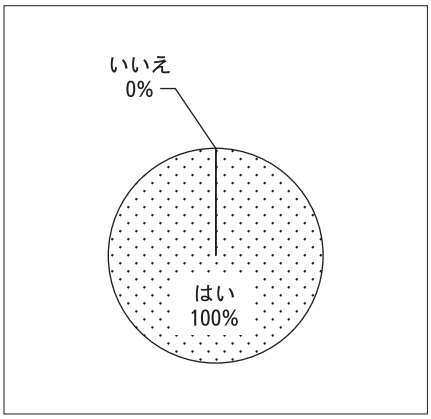


図９－１　今日一日楽しく過ごせたか

５　反省・考察

本稿の１章（はじめに）で示した本講座の開催目的に対して、以下に考察を記す。

①　地域住民に対して貢献を行うと同時に、下関短期大学の認知度を高める。

前述（４・５）の通り、参加者全員に本講座を楽しんでいただけた。親子の貴重なふれあいの時間を作り、同時に食と遊びについての学びができたという点で、地域住民に貢献できたと考えてよいであろう。また、平成22・23年度の講座から日程を変更したことや託児を設けたことで、これまでは参加できなかった方にも機会を与えることができた。付属幼稚園以外の保護者も参加していたので、本学の認知度を高めることができたと思う。また、付属幼稚園保護者には、日頃は外観しかわからない本学内を見ていただけたので、活動を認知して頂く上で大きな意味があったと思う。

②　地域住民に対し、家庭における「食育」の重要性を伝える。

今回は、調理体験に大きく時間を取ったので配布資料説明がほとんどできず、家庭における「食育」の重要性を十分に伝えきれなかった。次回は本講座を踏まえた家庭でできる「食育」とその結果として習得できると考えられる望ましい知識や技術を明確に伝えることにも力を注ぎたいと考えている。

③　子ども達に「遊び」を通じて食の楽しさ・大切さを伝える。

今回は、試食前に大型紙芝居「お米ができるまで」を上演したが、試食のメニューがパン食であったこともあり、子ども達の注意や興味・関心を十分にとらえることが出来なかった。

しかし、今後も「親子クッキング」で調理したものを食べるだけでなく、紙芝居・ペープサート等の教材を使用して、楽しみながら、食の楽しさ・大切さを伝える機会を設けるよう、メニューに応じた媒体等の工夫を行いたい。

また、「おもちゃ作り」に関していえば、導入として、「お弁当箱のうた」を取り上げること、食事の際に使用する「割りばし」を利用した手作りおもちゃを作って遊ぶこと、参加証をパフェの形にしたことで、子ども達に食の楽しさを伝えることができたと思う。

このようにクッキング体験と紙芝居や遊びを親子で一緒にしかも同日に体験したことで、子ども達は楽しみながら食への関心を深める良い機会になったと考えられる。

「食」と「遊び」は、幼児期における毎日の生活の多くを占めるものであり、関連性は大きなものであるため、子どもには遊びを通してしっかり食の大切さを伝える必要があろう。また、保護者にも今回の講座をきっかけとして、食の大切さに関心を持っていただき、親子で調理をする機会を少しでも増やし、家族で食に関する遊びを交えた楽しい生活を送ってもらいたいと願う。

④　親子がふれ合う時間と手作りおもちゃの良さを味わう機会を提供する。

本講座では、「親子クッキング」という内容を設定することによって、親子がふれ合う場を提供したと考えられる。一般家庭の日常生活において、厨房に入って調理するのは保護者が中心であろう。安全面への配慮・調理器具・設備の制限もあり、なかなか親子で一緒に調理を日常的に行うのは困難な家庭が多いと考えられる。しかし、講座終了後、「楽しかった」「家でもまたお母さんと一緒に料理がしてみたい」という感想を担当教員に語ってくれた家族もあった。従って、「親子クッキング」は親子がふれ合う時間を提供する役割を果たしたと考えられよう。

今回の調理体験を通して、親子ともに料理することの楽しさを感じることができたと思う。アンケートの記述にも「（子どもに）包丁を使わせることができた」、「家で一から子どもが調理するのはなかなかできないので感謝している」などの調理体験の導入の実施には支援が必要

ということを裏付ける意見が挙がっている。このことから、家庭外での調理体験の場を設け、食に興味を持ち、自宅でも実践してもらうきっかけ作りとして本講座は非常に意味があったと考えられる。

反省点としては、調理の際の親子に対する参加学生の補助である。制限時間内に調理を終わらせることも大切だが、講座の目的である「親子のふれあい」を実践できるよう、親子でできる作業（例：果物の型抜き・パフェの盛り付け等）など、促して進めていく配慮が必要であろう。

また、「手作りおもちゃ」に関していえば調理と同様、親子でゆっくりふれあって遊ぶ機会の少ない家庭も多いことであろう。テレビゲームや「ファミコン」など近代的なおもちゃが主流の昨今、身近にある素材（割りばし・輪ゴム）を利用して手作りのおもちゃを作る楽しさやその良さを味わって欲しいと考え「割りばし鉄砲作り」を取り上げた。親子で力を合わせながらおもちゃ作りに取り組む姿、出来上がった鉄砲で遊びに興じる子ども達と微笑ましく見つめる保護者、飛ばし方を一緒に考えたり保護者がやって見せたり、保護者自身も飛ばして楽しむ姿も見られ、「親子がふれ合う時間と手作りおもちゃの良さを味わう機会を提供する」という目的は概ね達成できたと思う。しかし、活動の様子や、アンケートの結果から、「親子のふれ合いを楽しむ」ことを意識した関わり方がまだまだ十分ではなかったとも感じられる。親子・家族のふれ合いを存分に楽しみ、手作りおもちゃの良さを味わってもらう為に、取り上げる遊び・おもちゃの内容、分かりやすい説明の方法、スタッフの人数や配置、制作から遊びへの流れの把握、遊びの場所の工夫や時間の確保など、今後に向けての課題として更に検討していきたい。

今回の体験を契機に家庭でも身近なものでおもちゃを作ったり、親子・家族で一緒に遊ぶ機会が増えることを願っている。

謝辞

本講座の開講および本稿の作成にあたり、ご協力・ご尽力頂きました、向尾正雄氏（下関市福祉部こども家庭課子育て支援係）、下関短期大学付属第一幼稚園・下関短期大学付属第二幼稚園、和文題名を英訳頂いた David Kalischer 氏（福岡市総合図書館映像資料課勤務）に対し、記して謝意を表します。

参考文献

・内閣府：「食育基本法」前文，2005年制定.
・下関市編集発行「下関ぶちうま食育プラン」，46pp.，2008年.
・稲員祥子　授業と保育現場における「伝承遊び」導入の試み『下関短期大学紀要』26号，pp.99-111　2008年３月.

・塩田博子・芳賀絵美子「付属幼稚園と短大の食育についての連携の試み
　　―３年間の意識変容と事業評価―『下関短期大学紀要』28 号，pp.43-54，2010 年３月.
・塩田博子・芳賀絵美子「幼児期（３～５歳児）の食育推進活動における媒体の作成と実践」『下関短期大学紀要』31 号，pp.33-46，2013 年３月.